戸牖其裏備屏息居閑之具下亦左岩右岸樹其間虞陰風陽日之氣由是來者無憚浴者有便以下依繁略之

與州あをさまの渡の潮中にあり、湯のまはるけたのかたち七なみ、七十七段也、

風土記　けたの數五百三十九歟云々素寂説

〔愛媛面影三温泉郡〕温泉

道後山の麓に在り、往古は熟田津石湯といひけるを、いつの頃よりか道後の温泉と云、此道後と云事は、平家物語、源平盛衰記等に、道前道後の境なる高縄山とありて、山西をすべて道後といひけんを、松山といふ城下の名におほはれて、今は温泉の邊の名とのみなりぬ、此温泉は神代より始りて、代々の帝王行幸せさせ玉ひし事度々なり、功驗他の温泉にまされば、浴する人千里を遠しとせずして此湯につどへり、昔は幾所にも涌出て、其湯々に湯桁といふ物を架して浴たりと見えて、六花集に、

伊豫の湯の湯桁の數は左やつみぎはこ、のつ中は十六

新葉集に

神さぶるいよのゆげたのそれならでわが老らくの數もさられず

源氏物語空蟬の卷に、いで〳〵およびをかゞめて、十はたみそよそなどかぞふるさま、伊豫の湯桁もたど〳〵しかるまじう見るなどあるをおもへば、かならず一所にはあらざりけむ、○中略

されど今は一棟にて上中下の三等に分てり、又養生湯とて、三所の湯の流をつる所を一處に湛たり、少將定行朝臣の建立し玉ひし也とぞ、○中略　俚諺集云、慶長十九年十月廿五日大地震、湯沒して出ず、其後湯神社前に神樂を奏し、祈て湯湧出る事舊の如し、貞享二年十二月十日大地震、泥湯湧出、後に清湯と成、寶永四年十月四日讃州大地震、温泉沒して不出、仍て湯神社に於て神樂を奏し、社造補あり、玉垣おし渡し、朱鳥居建立、道後町中より千本の神木を御山の麓に植、玉石に假殿